第８回高校生カンボジアスタディツアー（７月２９日～８月５日）

カンボジアでの学び

奈良県立国際高等学校　Pradeep I.

はじめに

私は、小学三年生の時にカンボジアに訪れたことがあります。そこで見た街中に溢れる「ごみ」の光景を高校生になった今でなお、覚えています。また、学校でごみに関する取り組みを行う中でカンボジアのごみの現状を調べた際、都市部でもごみ回収が行われていない地域があることを知りました。そこでまず、このカンボジアスタディツアーに参加し、カンボジアのごみの現状と環境問題の取り組みについて知ることからはじめ、近い将来、環境課題解決に向けた取り組みを行っていこうと決意しました。

このニュースレターでは、カンボジアスタディツアーで訪れた様々な場所の中で、特に印象的だった３つの場所について書こうと思います。

内容

・第一章　UNESCO プノンペン事務所訪問 1

・第二章　ツールスレン博物館＋キリングフィールド 2

・第三章　リエンダイ寺子屋 4

・第一章　UNESCO プノンペン事務所訪問

スタディツアー3 日目に UNESCO 事務所を訪問しました。UNESCO はご存じの通り、United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization の略です。近年、インターネットの普及とともにネット詐欺が増える中、メディアリテラシーの強化に努める Communication and Information Sector（情報コミュニケーション局）も創設されたことを初めて知りました。

ここで私は Science (科学)部門担当の Guech さんと、スタディツアーに参加する最大の目的である「カンボジアのごみの現状と環境問題の取り組みに」ついてお話をさせていただき、理解を深めることができました。

まず初めに、ごみの現状について伺いました。喜ばしいことに首都プノンペンでは、ほとんどの生活ごみが回収され、町の衛生を保てていることがわかりました。ですが、日本のように分別する制度がなく、すべてのごみが一緒くたに回収され、ビン、缶、紙などが再資源化されていないという現状です。また、回収されたごみが埋め立てられ、その地域での異臭、土壌汚染、不衛生な環境も問題になっていることを知ることができました。

次に環境問題の取り組みについて伺いました。ここでは主にトンレサップ湖と呼ばれるカンボジア最大の湖の保全活動を行っています。トンレサップ湖は漁業が盛んで人々に欠かせない場所なのですが、魚の乱獲や開発が進みすぎた影響を受け、漁獲量が減っています。そうした理由から、保全にあたるため１９９７年に自然との共生を目的とした MAB 計画に加盟し、漁師と湖で暮らす人々が協力して湖の保全にあたっているそうです。ですが、湖で暮らすほとんどの人は漁師で、生活のために多くの魚を売らなければならないのです。そこで、トンレサップ湖でのエコツーリズムの普及などで、収入源を多様化させる取り組みが行われています。

トンレサップ湖はカンボジアの漁獲量の６０％を占める重要なライフラインです。私も自然環境を維持していくために自ら出向き、取り組みに参加するなどして、課題解決にむけ活動しようと思います。

・第二章　ツールスレン博物館＋キリングフィールド

ポルポト政権とは何かご存じでしょうか？それは１９７５年―１９７９年まで続いたカンボジアの暗い歴史です。この政権は、階級・格差のない国家を目指し、医師や教師などの知識層が格差を作る原因だ、として殺害しました。殺害された人や強制労働で餓死した人々は約２００万人にも及びました。

その現場の一つを視察しに私たちは、ツールスレン博物館とキリングフィールドを訪れました。トゥールスレン博物館は、元は高校の校舎で、ポルポト政権下では尋問、拷問の場として利用された悲惨な過去を持つ場所です。約２万人もの人々がここで拷問されました。拷問部屋にはベッドがあり、そこに固定され、収容者をむち打ち、棒叩きで痛めつけたそうです。床にはいまだに血の跡が滲んでおり、その部屋の空気は明るい昼間でも異様に暗く、重たく感じました。

スピーカーを吊るした木

右の写真に写る女性（チャン・キム・スランさん）は当時、クメールルージュの幹部であった夫が内部粛清にあい、生後五か月の息子と身柄を拘束された際にとられた写真です。母の表情は絶望、恐怖を物語っているように思えました。この拷問所の生存者は２万人の中で、わずか１２人です。

我が子を抱えるチャン・キム・スランさん

人々はこのトゥールスレンで拷問を受けた後、別の場所に移動させられました。そこが、キリングフィールドです。痛々しい拷問を受けた人々はこの地で命を奪われました。処刑をしていたのは、少年兵がほとんどだったといいます。純粋で無知な子どもたちにポルポトの思想を教え込み罪のない人々を処刑させました。また、キリングフィールド周囲の住民に虐殺がばれないように、木の上に爆音のスピーカー設置し、人々の悲鳴をかき消していたそうです。さらに、別の木では足を持って木に頭をたたきつけられて赤ん坊が殺されました。

子ども・赤子を叩きつけた木

こんなにも命が軽く扱われていたという事実に私は、唖然とし、怒りさえ湧き出てきました。二度と残虐な歴史を繰り返されないよう、歴史を後世に伝えていかなければならないと、強い使命感を覚えました。

・第三章　リエンダイ寺子屋

「学校に行き学ぶ。」

これは、日本ではあたりまえのことです。

「文書を読み、書く。」

これも日本ではあたりまえのことでしょう。
しかし、カンボジアではそうではありません。

国の公用語であるクメール語の国民あたりの識字率は今なお約 80%。おおよそ、5 人に 1 人が非識字者(読み書きができない人)です。そこには、ポルポト政権下で学習する機会を奪われた、親の仕事を手伝うために学校を休まざる終えなくなってドロップアウトしてしまった、など様々な理由があります。そういった理由で読み書きができないままの方たちを支援するために寺子屋は授業を提供しています。

私たちは、シェムリアップ州にあるリエンダイ寺子屋を訪問しました。はじめに子どものクラスに行きました。授業は誰 1 人居眠りするような生徒はおらず、全員が熱心に学業に励んでいました。「寺子屋楽しい人？」と聞くと、全員が「はいっ！」と手を挙げている光景に驚きました。

日本では、学校は「行くもの」と、思われがちですが、彼らにとっては「行きたい」と思える存在だったのです。私は、「10 分くらい居眠りしたって」「1 日くらい学校を休んだっていい」と思う時もあります。ですが、リエンダイ寺子屋の子ども達が熱心に授業を受ける姿を見て、その考えを恥じ、日本という国で教育を受けられる幸せな環境に感謝できるようになりました。

その後、大人のクラスも訪問しました。

子どもクラスとは別に、午後６時から２時間大人のために識字コースも実施されています。４０代、５０代の方々が参加されていました。日中の仕事を終え、大人たちは「仕事の幅を広げるため」「子どもに読み書きを教えるため」、「詐欺に引っかからないように」という様々な思いを持ち、学んでいます。大人だから新しいことはできない、などと決めつけず、生活を豊かにして行くために「学ぶ」という前向きな姿に「はっ」と驚かされました。

最後に

このスタディツアーを通して、暗い過去から這い上がるカンボジアで、リエンダイ寺子屋の子どもたちが熱心に学ぶ姿勢や、大人の方々がより良い生活を目指し、学ぶ姿に感銘を受けました。私はこの人々に安心して暮らせる衛生的な街を提供するために、大学で深くごみの管理などを学び、いち早くごみの問題や、漁獲数減少の問題を現地の人々と協力しながら、課題解決に向けて取り組んでいきます。